

類音類義語について

武 部 良 明

一 考察の対象とその資料

語の形式たる音韻が相互に似ているように感じられる二つ以上の語を類音語と名づけ、その内容たる意義が相互に似ているように感じられる二つ以上の語を類義語と名づけることにする。この場合、ここで考察しようとするのは、その形式たる音韻が相互に似ておりながら、すなわち類音語でありながら、しかもその内容たる意義がまた相互に似ている、すなわち類義語である、というような語であり、これを類音類義語と名づけるわけである。たとえば「本抛」と「根抛」というようなのがこれであるが、要するに言語表現においてある種の支障を来たすところに問題を持つものである。それは次の例のような場合のことである。

父祖の代から島に築き上げた生活の本抛（根抛）を失つてからすでに十年目であります。

すなわち、話し手が「本抛」という語を用いたのに対し、聞き手がそれを「根抛」と聞いたという場合が起るのである。そうしてこういう混同が起るといふことは、言語を媒介とする表現及び理

解が円滑に行われたとは言えないということになるのである。

もつとも、実際にその場に居合せた聞き手が実際にどういふうに理解したかを調査することは困難である。そこでここでは、速記によつて作られた国会の会議録を速記練習用として再び朗読する際に速記練習生が出したミスのうち類音類義語に由来すると考えられるものを集めて資料としたわけである。そのためこれらは、実際にその場に居合せた聞き手が必ずそういう混同を起したということにはならない。何となれば、速記録そのものの朗読は、実際の演説の場合と異なり、話し手の表情やその場の雰囲気からである。しかし一方では、これを補うような形で、実際の演説よりも明瞭に発音されることが多いのである。従つて、それにもかかわらずそこに見出された類音類義語の混同は、やはり国語における類音類義語の実態を表わすものであり、それを考察する資料として一応役立つと考えられるわけである。

二 類音という観点からの考察

ここに上げた「本抛」と「根抛」という例は、「抛」の部分で

なく「本」と「根」の部分が類音と考えられるものである。そこで多くの実例から同じく「本」と「根」との関係にあるものを集めて見ると

本気—根気 本源—根源

などがある。またこれを音韻の立場から見れば「ホン」と「コン」であり、この関係にあるものを集めて見ると

本回—今回 本期—今期 本席—今席 本夕—今夕

本月中旬—今月中 本年度—今年度 本国会—今国会
などがある。さらによく見ると「ホ」と「コ」との部分の類音なのであるから、この関係で集めて見ると

法案—考案 砲撃—攻撃 法制—構成 放言—公言

方式—公式 法則—拘束 逢着—膠着 法認—公認

方法—方向 方策—工作 法益—公益 法務—公務

保有—固有 法話—講話 報復—降伏 豊水位—高

水位 放牧地—耕牧地 補足的—姑息の

など数多く見出される。しかもこれを音声学的に見れば「p」と「t」との関係になるから、その関係でさらに範圍を広げて見ると

廢止—開始 誤配—誤解 發動—活動 配付—回付

判定—鑑定 農繁期—農閑期

平易—輕易 返上—献上 返納—献納 平伏—敬服

再編—再建 併用—繋養

などにも及ぶ。こう並べて来ると、古くわが国において「海」「好」など支那語の「h」が国語の「x」として取り入れられた

ことも思合われる。これに關しては、當時は国語の音韻体系に「p」という音がなかつたために発音位置の類似から「x」として取り入れられたと説明されている。ところが後に「p」の音が使われるようになってからも、われわれの祖先の行つた「p」と「x」との混同は、われわれの時代にまでその尾を引き、言語生活の円滑な遂行に關してその障害となつていたのである。

この場合、「p」と「x」とは、同じような発音位置における摩擦音と破裂音という關係で類音となつてゐるわけである。このように発音位置の類似から類音となつたと考えられるものには、他に次のような場合がある。

私はあまりにも昔と比べてまして貧弱であるということを嘆（断）ぜざるを得ないのであります。

われわれが世界の第一線として平和を主唱（主張）するその態度と、今仰せになりました行き方とが……

私は一割二割の増産は必ずできるといふことを、ある精農（政）の人からとくと承つたことがございます。

この場合の嘆と断の「x」と「p」とは同じ発音位置同じ発音法による無聲音と有聲音の關係であり、主唱と主張の「t」と「p」とは同じような発音位置同じ無聲音による摩擦音と破裂音との關係であり、精農と政党的の「p」と「x」とは同じ発音位置における有聲通鼻音と無聲破裂音との關係である。こういう観点から類音となつてゐる実例を整理すると、次のような場合がこれに該当するようである。

遺子—遺児 独占—独善 破綻—破談 神秘的—審美

的

梳毛—粗紡

古来—古代

現在—現代

能力—勞力

全敗—連敗

暖國—南國

努力—助力

知性—至誠

總括—統括

覺悟—確保

予見—予言

四散—離散

生肉—冷肉

法理的—合理的

これらはいずれも発音位置の類似から類音になつたと考えられるものである。

このように見えて来ると、思い合はされるのが音韻變化の諸法則のうちの音韻相通という項である。たとえば、金田一京助博士の「国語音韻論」には「音韻相通」として「その区別は感じられながら、さう発音しても、別に異様にも感ぜず、意味にも支障なく通用する音群」(たとえば東京方言のヒとシ)とか「少しは異様に感ぜるけれど、語に由つては差のない程度のもの」(たとえばサミセンとシャミセン)などが上げられているからである。そうしてそこにはそういう条件として、前記の発音位置の類似によるものの他に、もう一つ次のような一項が指摘されている。

発音の音感の近似、即ち耳にひびく響きが似ること、発音の場所などは異つても、聞え様が似て聞えるといふ関係を有ち合はすこと

従つて、次のような場合はこの発音の音感の類似による類音関係だと説明できるわけである。

政府といはしめても金利の引き下げあるいは諸税(租税)の軽減、こういうような措置を強力にとりまして……

そこで損害賠償の範囲でありますが、若干の学者の言っていることをそのまま援用(引用)いたしますならば……

この場合の諸税と租税の「*t*」と「*s*」とは発音位置こそ異なるが同じ摩擦音であり、援用と引用の「*e*」と「*i*」とは無障害の有声音として同じ母音である。このような観点から種々の実例を整理すると次のようになる。

理念—裏面

区内—区外

意味—意義

卑見—私見

炭況—環境

原票—伝票

同系—傍系

軽減—低減

月報—別報

運炭—運搬

苦渋—苦情

捕提—把握

隱蔽—掩蔽

運転士—運

転手

視察団—使節団

さらに

違背—違反

十二才—十二、三

一週間—一瞬間

など母音と撥音との関係もこれに準ずるようである。

しかしながら、実際にはこのような相通のもののみが類音関係となつてゐるわけではない。たとえば次のような例が存するからである。

地方職員といはしましては、こうした意見についてはむしろ不満(不安)の意を表したいくらいでございます……

お配りしました横書きの文章(文書)のものがございます。

この場合、不満と不安の「*ma*」と「*a*」とは「*ro*」の脱落であり、文章と文書の「*oo*」と「*o*」とは長音の短音化で母音「*o*」の脱落によるものである。これらはいずれも音韻變化の法則における音韻脱落に該当するものであり、この観点から整理す

ると次のようになる。

議員—委員	記録—記憶	阿片—亜鉛	日々—一日
理学—医学	流出—湧出	実験—事件	救貧制度—
給費制度	骨格予算—国家予算		
掌理—処理	郵送—輸送	一同—一度	監視哨—監視所
委員外—院外	給付金—寄付金		

また実際にはこの逆の場合も起つてゐる。たとえば次のような例の場合がこれである。

健全財政の建前をとるのが穩当（本當）であらうと思ふのであります。

義務教育諸学校（小学校）の危険校舎の改築費の補助でございます。

この場合、穩当と本當の「o」と「ho」とは「h」の添加であり、諸学校と小学校の「Jo」と「Joo」とは短音の長音化で母音「o」の添加によるものである。これらはいずれも音韻変化の法則における音韻添加に該當するものであり、この観点から整理すると次のようになる。

欧文—邦文	延納—返納	周縁—周辺	簡約—簡略
權威—權利	改惡—改約	西欧—西洋	公安—港灣
費目—品目	施行—執行	警査長—警察長	
採取—採集	許与—供与	含油率—含有率	小作權
耕作權	租收入—總收入		

これらの場合、音韻脱落と音韻添加とは、いずれもある音韻の有無による關係であり、その音韻の有無が相互に類音の關係になつ

ていると考えられるものである。

もつとも、実際に類音關係と思われる語を整理すると、前記のような相通、脱落、添加の立場から説明できないものも存在するようである。たとえば次の例のような場合がこれである。

八月ごろから纖維雜貨とは逆に注文が減つて参りまして、相當苦境（不況）に立つております。

日本の極端なる国家主義いわゆる排外的（對外的）の国家主義というものは……

着々とこれが実施に邁進しておる現況（現状）でございます。この場合、苦境と不況の「キ」と「フ」とは前記本拠と根拠と同じくハ行音とカ行音の關係ではあるが、「ホ」と「コ」とが「フ」と「キ」というように同じような発音位置による発音法の相違であるのと異なり、発音位置も発音法ともに相違している。それにもかかわらず

苦心—腐心 空氣—風紀 空地—風致 空文—風聞
など他にも同じような類音關係が見出される。このような關係は、同じくハ行音とカ行音との關係にある「フ」以外のもう一つの音「キ」と「ヒ」すなわち「キ」と「ヒ」についても言える。たとえば

機密—秘密	規定—否定	企業—鰥業	危害—被害
既課税—非課税			

などがこれである。また二番目の排外的と對外的における「フ」と「キ」とは、発音位置も発音法も異なり、しかも前記「ク」と「フ」または「キ」と「ヒ」のごとく同行の他の音が類音となつ

ているような関係でもない。しいて求めれば頭音として無声子音を持ちながら尾音として同じ母音を持つというような関係にすぎない。しかしこれも他に

半期—短期 搬送—担送 閉止—停止 偏在—点在
方今—当今

などその例が数多く見出されるのである。さらに三番目の現況と現状における「ど」と「る」とは、頭子音として一方は無声子音であり、一方は有声子音であり、ただ同じ母音を持つというだけの関係にすぎない。しかしこの場合も他に

心況—真情 近況—近状 環況—感情 供与—讓与

などその例が見出されないこともない。すなわち、同じ母音を持つ音節というだけでも類音関係が成り立つのである。この観点から整理すると、次のような語の場合もこれに該当するようである。

医学—医業	外客—來客	外局—内局	海没—埋没
罪惡—害惡	再訂—改訂		
危局—時局	詰問—質問	地震—微震	審議—審理
新作—近作	迅速—敏速	獸皮—牛皮	終夜—晝夜
求職—就職	週日—休日	醜狀—窮狀	牛肉—乳肉
列席—欠席	減額—全額	原文—前文	熱狂—絶叫
全額—年額	全免—減免		
医業—医療	異論—異存	両者—業者	最良—最上
賞讃—協讃	増長—膨脹		

これはいずれも子音の方が響きが短かくて小さく母音の方が響きが長くて大きいという点に由来するようである。

このように見て来ると、江戸時代にあつた語呂合せという言語遊戲が思い出される。それは同列音を基礎に、たとえば「猫に小判」というのに対し「下戸に御飯」と合せて楽しんだ遊戲だからである。この行き方は、地口、口合ひ、秀句、しゃれなどにも数多く見出される。すなわち、国語に類音語が多いということはすでに古くから氣づかれており、積極的に利用されていたことなのである。ただ語呂合せその他においては、表現する方も理解する方も類音語の使用を意識している限りにおいて、言語生活の支障とはならず、かえつて類音語の存在が言語生活にうるおいを与えるものとなつていたのである。しかしここで特に取り上げた類音類義語は、こういう意識的な使用に対し、むしろ無意識的な使用と考えられる場合である。すなわち、区別しようとすれば十分区別のできる類音語を区別しないために起る笑いか、わざわざ類音語を持つて来てその似たところを楽しむというような意識的なものではなく、うつかりすると話し手はそのつもりでないのに聞き手にそういうつもりのように受け取られるものだからである。つまり、話し手の言語表現に用いた語がそれと類音類義の他の語として理解される場合なのである。そうしてこのことが言語生活の円滑な遂行という立場から問題になるというわけである。

三 類義という観点からの考察

ここまでに考察して来たことは、類音類義語に見出される諸関係を類音という観点から歸納しようとしたものである。従つてここに導き出された類音関係に従つてすべてが混同されるというわ

けではない。もしもこれらすべての類音が混同されるならば、国語は言語としての機能を失うかもしれないが、実際にはその危険性が何らかの形で救われている場合も少くないのである。類音による混同の危険性から救われる第一の場合は、類音関係にあるべき音の組合せが国語の語として存在しないときである。たとえば前記の「本拠」に対しては「コンキ」の他に「トンキ」「コンチ」「コンコ」「キシンコ」「オンキ」……などいろいろ考えられるはずであるけれども、「コンキ」の他はいずれも国語の語として存在しないのである。今考え方を単純にするために「h」と「k」との関係に限って考えると、たとえば次のような場合がある。

その内容は総理大臣に勸告書（ハンホクシヨ？カンホクシヨ？ハンホクシヨ？）の格好で出させているわけであります。

この場合「p」が「b」と混同しないのは、「勸告書」以外の語が存在しないからである。危険性の救われる第二の場合は、アクセントが異なるときで、これについてはすでにしばしば指摘されている通りである。たとえば「辞海」の「アクセント摘要」には次のように書かれている。

国語のアクセントは、同じ音のことばの区別、全く同じでないにしても響きの似ていることばの区別に役立つ。

たとえば次のような場合がこれに当る。

一昨年九月一日の改正法施行当時にわれわれの考え方を声明いたしました、大体その線（その点？）は基本的には変わっておりませんが……

この五ヵ年計画を実施するためにはこの五ヵ年間（五ヵ年半？）に五百億の資金が要するということになるわけですが……この場合の「その線」は③、「その点」は④であり、「五ヵ年間」は③、「五ヵ年半」は⑤だからである。危険性の救われる第三の場合は、国語使用の常識によるものであり、実際にはこのためにこそ類音語の多くが混同されずに存し得るのである。たとえば次のような場合がこれである。

また特にある企業に生産が集中するというような弊害（形骸？）の認められません限り……

新聞紙上その他で見た範囲（簡易？）でございますので私もよくわかりませんが……

これらの場合に弊害や範囲の代りに形骸や簡易を使うことはおかしいし、たとい発音が不明瞭でも形骸や簡易だと理解するよりは弊害や範囲だと理解する方が一般的だと考えられるくらいである。これを要するに、国語も有限個の音韻から成り立つてはいるが、その有限個の音韻のあらゆる組合せがすべて単語を構成するわけではなく、たといそれらのうちの幾つかが類音関係にある語として存在していても、前後の関係によつてその位置に存し得る語にはおのずから制限が加わるのである。そのために類音関係が成立し混同される危険性がありながらも、実際には不便を感じない場合が案外に多いのである。従つて、実際に混同されるのは、相互に類音関係にある語が存在していて、両者のアクセントが同じで、しかも実際に用いられた前後関係からはいずれにも理解できそうなもの、ということになるわけである。それならば、類音語のう

ちいかなるものが混同されるかということであるが、これが結局その内容たる意義が相互に似ているように感じられる場合、すなわち類義語の場合にはかならないのである。そこで類音語のうち類義語だと考えられるものは意義的に見てどんな関係にあるかというところが問題になるのであるが、これには大体次の六種類が考えられるようである。

その第一は、意義的に見て全くあるいはほとんど同じという関係になるものである。たとえば次の例のような場合がこれである。二十九年度すなわち本年度（今年度）は実はまだきまつていないのでございます。

政府それ自体としてはどういうふうに考えておられるのが明確（明白）さを欠くわけであります。

この場合、本年度も今年度もいずれも同じく「ことし」であり、明確も明白も大体が「明らが」である。このように同一という関係にある語としては

私見—卑見 本拠—根拠 放棄—放置 現況—現状

軽減—低減 改訂—改正 固持—保持 主唱—主張

申述—陳述 今二十八年度—本二十八年度 本月中—

今月中 一日平均—日々平均 高水位—豊水位

などの例が見出せるようである。第二は、意義的に見てある程度異なるにしても、一般には大体同じような意味として受け取られている関係になるものである。たとえば次の例のような場合がこれである。

本日あらためて配付（回付）資料につきまして簡単な御説明を

加えますと……

特に国内資源の活用を推進し外貨流出（流失）の増加を防止しななければならない。

この場合、配付とは配り渡すこと、回付とは回し渡すことであるが、要するにここでは渡した資料ということである。また、流出は流れ出すこと、流失は流れ失うことであるが、要するにここでは外貨が外国に出て行くということである。このように、意義が多少ずれるにしても類似という関係にある語としては

不満—不安 文章—文書 方向—方法 援用—引用
措置—処置 穩当—本當 発動—活動 拘束—法則
などの例が見出せるようである。

次の第三は、意義的に見てなるほど似ているけれども、正しい語の場合よりも意義が狭くなつてしまふという関係になるものである。たとえば次の例のような場合がこれである。

すなわちビキニ事件（実験）は、アメリカの信託統治地域内でアメリカの行つた危険行為が……

またできるだけそれより下げて硫酸化学（価格）に對しまする影響がないようにということを考えております。

この場合、ビキニ事件はビキニ実験によつて起つた事件であるから後者の方が前者の一部である。また硫酸化学に對する影響のうち価格に對する影響はその一面にすぎないから、これも後者の方が前者の一部である。このように意義の縮小という関係にある語としては

諸税—租税 構成—合成 調整—調停 苦況—不況

激評—激賞 微動—微騰 全土—全都 諸学校—小

学校 西洋諸国—西欧諸国 耕牧地—放牧地

などの例が見出せるようである。第四はこれと反対の場合で、意義が広くなつてしまふという関係になるものである。たとえば次の例のような場合がこれである。

そういうふうな価格が出て来たということがまた炭況（環境）の悪化に心理的に非常に大きな影響を与えまして……

総理大臣といえどもその平等の原理には法制（構成）の上では大した差はありません。

この場合、炭況とは一般的環境のうち特に石炭に關するものであるから後者の方が前者を含むことになる。また法制とは一般的構成のうち特に法律に規定されている範圍のものであるからこれも後者の方が前者を含むことになる。このように意義の拡大という関係にある語としては

国道—国土 法案—考案 行政—情勢 古代—古来

排外的—対外的 来四半期—第四半期

などの例が見出せるようである。

第五は、全く異なるとまでは行かないにしても、従つて大きな観点から見れば同じ範圍に属する語ではあつても、その意味するものが相互に別々であるという関係になるものである。たとえば次の例のような場合がこれである。

なお種子並びに飼料（肥料）のあつせん助成についてもちよつと御説明を申し上げておきます。

本年度は再三言つて、おります通りに上半期が一割五分余りの豊

水でありまして、その結果需給（自給）状況がきわめてよくなつております。

この場合、飼料とは動物に對するえさであり肥料とは植物に對するこやしであるから全く別のものであるが、ともに農家の必要とするものである。需給とは需要供給の關係であり自給とは自分でもかなうことであるから全く別のことであるが、ともに生産關係の状態を表わす語である。このように相当異なる關係にありながらしかも類義語となつてゐるものには

資力—主力 開銀—勸銀 制度—程度 巷間—後半
精農—政堂 生肉—冷肉 洗練—宣伝 雜稅—脱稅
司法—地方

などの例が見出せるようである。最後の第六は、同じ範圍に属する語ではあつても、その意義が單に別々であるだけでなく、全く反対になるという關係に立つものである。たとえば次の例のような場合がこれである。

この問題は当初から、ただいま申し上げましたように、期間内になるべく廢止（開始）したいというのが根本方針でございましたし……

普通に放任（公認）してある場合の設備の擴張の程度ではどうして必要に応じ切れない。

この場合、廢止とはやめることであり開始とは始めることであるから全く反対になる。また放任とは構わないでおくことであり公認とは構うことであるからこれも全く反対になる。このように全く反対の關係にありながらやはり類義語となつてゐるものには

否定—規定 委任—否認 拝辞—拝受 列席—欠席
 刺殺—自殺 報恩—忘恩 今秋—今春 院内—院内
 老顔—童顔 在世—来世 被用者—使用者 農閑期
 —農繁期

などの例が見出せるようである。

このように考えて来ると、ヨーロッパにおける言語学にも homonym (同音異義語) synonym (類義語) antonym (反意語) という考え方のあることが思い出される。さらにくわしくわかる人は、このうちの homonym につき、綴りの同じものを狭義の homonym とし音だけが同じものを homophone と名づけて区別する。こういう考え方を概念的に押し進めれば音だけが類似している異義語 synophone というものも考えられる。ここで考察して来たのは要するにこの synophonic synonym 及び synophonic antonym に当るものである。

四 類音類義語の問題点

こういうふうに考察して来ると、類音類義語に関しいかなるものが類音であり、いかなるものが類義であるかについて、とにかく法則的なものが求められたことになる。そうしてこのように見て来るとその悩みは結局漢語に由来するのではないかということにもなる。何となれば、わが国においていわゆる国語国字問題を論ずる人達の間に、漢語には同音異義の語が多くて言語生活の円滑な遂行に障害となつているという考え方が広く行われているからである。また当用漢字表の施行とそれに伴う用語の改訂という

大きな国語政策の一環として、これら同音異義語のうちのあるものが整理されようとしているからである。しかし実際には同音異義語が何も漢語に限つたものではないごとく、類音類義語も漢語のためであると即断することは当らない。ここでは便宜わかりやすいようにその類の豊富な漢語のみを例示に用いて来たが、それは和語にも存しているのである。たとえば次の例における場合がこれである。

また両者の意見の食い違いがあまりにも広がつた（ひどかつた）ために……

これが中小企業の建前といたしまして、設備資金で借りた（足りた）のか……

当初の予定通りを調達することはきわめて困難の事情になる（ある）わけでありませう。

言葉はきわめて平易なるむしろ常識的な言葉の羅列ではありませんけれども、その内容に織り込まれて（盛り込まれて）おりますところは……

これらもまた、類義でありながら、発音位置の類似、発音の音感の類似、音韻脱落、音韻添加などの関係にある類音語となつてゐるのである。

このように和語でありながら類音類義語となつてゐるものには、次のような語もある。

何らか—何だか 開ける—上げる 満たす—乱す 書
 き違える—はき違える むら—むだ 広場—広間 し
 たい—しない 申し入れ—申し出で

いささかの—いささかも 布く—引く 間違えまして—
間違ひまして させて—さして 付掛け—月掛け
織り込む—追ひ込む 内訳—打ち明け 蔽う—追う
陥る—落ちる そそぎまして—そそぎまして
關係をして—關係として 起る—誇る 十何%—十七%
得なければ—経なければ それをまた—それもまた 才
取—さや取り
繰りかえ—振りかえ

また、次のようなものは漢語との間に類音類義語となつてゐるものである。

（中学校の研究指定校その他でございますが、ほぼ前年度（前年と）同類でございます。

これに類する形としては

増が百五億円—増加百五億円 できふでき—適不適 毎
々—前々 關係等に—關係とに 不利—ふい 役名—
役目 汚損—大損 他面—ために

などが見出せるようである。さらに一音節の助詞はその有無までが類音類義關係になることがある。

商工委員の各位が非常に熱心にこの問題を取り上げられまして御検討（を）—いただいておりますことは……

裁定のような強權に待つということは先ほど（も）申し上げましたようになるべく避けたい。

これは実際には「御検討—いただいて」「先ほど申し上げました」と言つたのを「御検討を—いただいて」「先ほども申し上げました」

と聞いた場合であるが、この逆の場合も見出せるようである。これを要するに、類音類義語の存在は何も漢語に限つた現象ではなく、広く和語の場合にも及んでいるのである。

このように考へて来ると、国語国字問題を論ずる人達は、今度は次のように考へるかもしれない。

それは日本語が悪いのだ、この日本語を改良しなければならぬ。

しかし、類音類義語の存在は何も日本語に限つた独自の現象でもないようである。たとえばわが国では一般にそう考へられていない英語においてすら、次のような例が数多く見出されるからである。

If part of the organization claims the right of secession (cessation) ……

これは secession (脱会) を cessation (中止) と聞いた場合である。このような關係にある語としては、さらに次のようなものを上げることができる。

allusion (ほのめかすこと) — illusion (幻影) collision
(あぐれき) — collusion (馴れ合い) curtain (窓掛け)
— carton (板紙) damnation (地獄に落ちること) —
domination (統治) decease (死亡) — disease (病気)
eminent (拔きんでた) — imminent (切迫した) ex-
pansive (広大な) — expensive (高価な) fiscal (国庫の)
— physical (物質の) ingenious (真摯な) — ingenious
(器用な) prescribe (命令する) — proscribe (追放す)

re) prevision (先見) — provision (用意) supply-
ration (化膿) — separation (分離)

そうして一方では、これらを基礎としたしやれも行われている。
The oral vocabulary commences with the first spoken
word, and it is drawn naturally from the aural (ear)
vocabulary.

この場合 oral は「口頭の」であり、aural は「聴覚の」である。
また速記の立場からはこういう類音類義語に対する悩みも指摘さ
れているのである。

速字の形が混同しやすいというためでなくその語の意味に関し
て頭の中で混同するために若い速記者が特に注意しなければな
らない語がある……これらの語は多くの場合発音においても余
り差異がないのである。(Willard B. Bottome "The Steno-
graphic Expert")

これを要するに、たとい同音異義語がたくみに整理されたとして
も、類音類義語がやはり同じようにわれわれを悩ますに違いない
のである。それならば類音類義語は何故に存在するかということ
であるが、これに関しては、言語そのものの立場、話し手の立場
及び聞き手の立場という三つの観点から、それぞれその理由が考
えられるようである。

まず第一の言語そのものの立場は、言語が形式として有限個の
音韻を用いながら、語彙の方は全体の体系を考えることなくそれ
ぞれ独自の立場においてつくられた、ということである。これを
解決するためには語彙そのものの整理ということが問題になるわ

けであるが、この方は術語の整理のように全体の体系を考え得る
場合を除いては全く不可能に近い。たとえば「技手」に対し「技
士」との混同を防ぐために「ギシュ」という発音を「ギテ」とい
う発音に改めることはできる。あるいは「聴聴」に対し「聴取」
との混同を防ぐためにこれを特に「視聴」という新語にかえるこ
とはできる。かくして非常に不便を感じる一部の語を人為的に整
理することはできるかもしれない。しかし実際には、新語、略語、
固有名詞、外来語など数多く混入して来るのであり、これらにお
いてすべての類音類義語をなくすことはどうもできそうにない問
題である。すなわち、類音類義語をなくしてしまふことは不可能
であり、類音類義語は必然的にとにかく存在するとせざるを得な
いのである。ただ実際にはこれをさらに多くさせるのが話し手及
び聞き手ということになっているのである。

第二の話し手の立場は、話し手において標準的な発音ができる
とは限らず、使用する語の標準的な発音やアクセントを知ってい
るとは限らず、しかも発音に当つて労力の節約が行われ必ずしも
明瞭な発音をするとは限らない、ということである。たとえば次
のような場合がこれに当る。

結果としては縦坑の開さく計画というものを自然に放棄(放置)
するということにならざるを得ないのであります。

さらに百十四万個(約十四万個)に相当いたします取引証明
用の計器の検査を執行しなければならぬのです。

これは主なる点は開銀(勸銀)の金利一分引き下げによる十三
億余りというものが大部分を占めておるわけであります。

これらの例はそれぞれ、「キ」が「チ」と聞えるように発音する地方の出身者の場合、「ヒャク」の部分が⑥でなく①のように発音された場合、「ギン」の「ロ」に引かれて「カイ」の「エ」が「ロ」に近く発音された場合、などに当るものである。

特にこの最後の労力節約のために生ずる類音類義関係は、音が續いて現われる際一つの音が隣の音に引かれてその影響のもとに変化するいわゆる音韻同化に由来するものである。この場合、「孝」と「高」が「カウ」でなく「コオ」となっているように、同化した形が世間一般に行われていれば問題はないが、同化する可能性がありながら同化しないしており、しかも同化した形に該当する語が他に存するとき、この両者の間に類音関係が生ずることになる。たとえば次のような関係の場合もこれである。

自給—需給 隠蔽—掩蔽 視察—查察 意想外—予想外

公務員—公民 未利用—未了 自由労働—重労働 利率—料率 自由品目—十品目 自主性—実勢
拳拑—居所 施術—手術 阻却—阻隔 多衆—多数
行旅病者—行路病者 擬証—罪状 擬裝—擬造 救出—救恤 充填—充電
質金—質銀 受託者—受諾者

特に話し相手が同じ言語団体の場合にはそんなに発音しても用が足りるのであり、そのくせが出てしまうと同化を中心とする音韻変化のためとんでもない混同が起ることも見られるのである。

しかも話し手の方では、聞き手を退屈させないために、全体の

意味さえ通じれば個々の語はどうでもいいという話し方をする場合がある。

ライスという学者がおりますがこれは……、またウェーベルクは……、スピロプロス、ギリシャの学者であります……、またイーグルトン、アメリカの学者であります……

これはビギン事件に関して国際法上の損害賠償について行われた説明であるが、ただ各学者はこういうふうに言っているということを伝えるのが目的である。従つて個々の学者の名前を正確に覚えてもらう必要はないが、具体的な名前を上げた方が名前を上げないよりは聞き手に対して親切なのである。また聞き手もそれらの学者の名前をその場ですぐ忘れてしまふかもしれないが、具体的な名前を上げてもらつた方が話し手を信頼することができるといふだけのことである。そうして話し手がこのような態度をとつたとき、類音類義語は一段とその数を増すわけである。

第三の聞き手の立場は、聞き手において話し手の発音が正しく聞き取れるとは限らず、話し手の用いる語をすべて正しく判断してくれるとは限らず、理解しようとするために自分の知らない語に出会つた場合自分の知つている語として同情的に理解してしまふということである。たとえば次のような場合がこれに当る。

しかし御承知のようにこれはホルメナ（ホルメナ？ホルメラ？ホルメラ？）というところに現在日本人が七百人近くおりました……

まず定額電燈は現状通りあるいは現在よりも多少下る、こういう方向（方法）で進めております。

現在の聴聞がきわめてこまかい点についてまで聴置（聴取）しなければならぬということになっておりまして……

これらの例はそれぞれ、コルメナというパラグアイの地名が正しく聞き取れないためにいろいろに聞いてしまった場合、語としては方向も方法も両方とも知っているが最初に思い浮べた方の方法と聞いてしまった場合、聴置という語を知らないためにおそらく聴取の発音が悪かったのだらうと聞いてやつた場合、などに当るものである。

ここで特に注意すべきは、最後の同情的態度によつて混同される類音類義語の場合である。それは同情的態度というものが言語活動の円滑な遂行に欠くべからざるものだからである。何となれば、たとい話し手が発音を間違えても、あるいは語そのものを間違えても、聞き手に正しく理解してもらへるのは聞き手がこの同情的態度を持つたためにほかならないからである。たとえば次のような場合がこれである。

片方の個人の貯蓄がどれだけふえるかという点を抜きにして考えてみますと、やはりどうしても個人ビヨシ（消費）はふえざるを得ない。

本年度一・二%の総人口の増加があるわけであります。従いまして相当数の失業者（就業者）の増加も出て来なければならぬわけでありまして……

前者は「シヨヒ」という発音を「ヒヨシ」と言い損つてそのまま過ごしてしまつた場合であり、後者は就業者と言うべきところをうっかり反対の意味の失業者と言つてそのまま過ごしてしま

つた場合であるが、いずれも聞き手は正しく理解しているのである。これは極端な場合であるが、一般に話し手の発音やアクセントが間違つていても、あるいは発音の労力を節約するために音韻変化が起つていても、それが正しく理解できるのはこのような同情的態度のためである。また類音関係で二通りの発音を持つ語が共存し得るのもこのような同情的態度のためである。そうしてこの同じ同情的態度が自分の知らない語に対して行われた場合、それを類音類義の自分の知っている語として理解してしまう結果をもたらすのである。たとえば次のような語の場合もこれである。

乳肉—牛肉	業態—業界	巨億—五億	闊点—点々
定日—平日	差遣—派遣	閉止—停止	深海魚—近海魚

時にはこの逆に、特に最近に覚えた特殊な語と類音類義関係にある一般的な語に出会つた場合、わざわざその特殊な語の方に聞いてしまうことさえ起るのである。このように見えて来ると、類音類義語に由来する混同は、言語体系の欠陥とともに、言語技術そのものの本質に基くとも言えるようになるのである。

五 結 語

以上をもつて、類音類義語というものはとにかく存在するのだということ、それらにはどんな語があるか、どういうふうに混同されるかということ、などが一応明らかとなつたわけである。ただ日常の言語生活においては、聞き手が疑問に思えば問ひ返すことができるということのためにある程度救えるのである。またそ

の場で問い返す機会の与えられていない演説の場合においても、話し手が聞き手に一言一句の正確な理解を要求するのではなく、むしろ全体としての意味の理解を望んでいるとか最後の結論そのものの理解を望んでいるために救えるのである。しかし言語活動そのものの本質としては、一言一句の正確な理解に基く全体の理解という方向をとつた方が好ましいのは言うまでもない。そこで最後に、類音類義語による危険性を防ぐために実際にはいかなる対策が行われているかを取り上げることにする。

まず話し手による対策であるが、これは、明瞭な正しい発音を習得すること、類音類義語の存在を意識すること、適当な修飾語や説明句を使用すること、聞き手の言語能力を考慮すること、などに要約される。たとえばラジオ放送において工夫されている次のような対策がこれである。

放送ではこういう同音語や類音語をなるべく和語系統の耳で聞いてわかりやすいことばに言いかえるか、前後の言いまわしを工夫するかして、聞き手に誤解を起させないように注意しなければならぬ。(日本放送協会編「ラジオ・ニュース書き方と編集」)

すなわち、話し手が話すことは聞き手に理解させることであり理解してもらうことだという意識を持つことによつて、言語生活に有効に遂行することができるのである。

しかしながら実際には聞き手による対策もおろそかにしてはならないのである。それは理解しようとする意図をおろそかにしては言語生活そのものが成り立たないからである。この立場におけ

る対策は、訛音や発音の乱れなどについて耳を馴らしておくこと、類音類義語の意義用法を十分に心得ておくこと、時事問題、新語、各部門の基礎的な術語、固有名詞などを初め語源、造語法などに関しても勉強し、理解できる語彙を豊富にしておくこと、常識を発達させ前後の関係を中心に話し手の表情やその場の雰囲気等を参考に虚心坦懐な気持で理解してやること、などである。たとえば次のような場合についてその対策を考えてみる。

ただいま官房において審査中であります。本月中(今月中)には農林省としての最後の態度を決定いたしましたして……

さらにこのような国民総生産の価額(価格)が今年度の経済の動きの中でどこに消費され……

しかしどうしても事情やむを得ない場合のために現在あります土地調整(調停)委員会の機能を拡充強化いたしましたして……

しかしちようど一筆か農単(農村?)かという問題で議論されましたように、結局一筆の場合には広く薄くばらまく格好になるわけでございます。

今の夏山生産における労務の確保の問題であります。御指摘の通りちようど北海道における農繁期(農閑期)と競合いたします関係上……

これらのうち、最初の本月中と今月中とはこの二つの形があることを意識しそのうちのどちらであるかを注意して聞くより仕方のない場合である。しかし次の価額と価格とはこの両者の意義用法を心得ていればよいのである。その次のは実在するものが土地調整委員会だということを知っていることによつて、さらにその次

は農単という略語が農業災害保険の方で農家単位だということを知っていることによつて、それぞれ解決される場合である。最後の農繁期に至つては夏が農繁期か農閑期かを考えれば間違えるはずがないのである。実は、明瞭に区別できる音を話し手の発音ぐせとして区別せずに聞き、あるいは機械でも区別できない音を語の一部として聞くことによつて区別できるのも、このような聞き手の態度によつて初めて可能となるのである。そうしてこの態度こそ、話し手の話を一言一句逐語的に文字化する立場にある速記において絶対に必要とされる理解態度にはかならないのである。

これを要するに、一方ではとにかく實際問題として類音類義語が存在するのであり、これを整理してしまふことは不可能なのである。従つて、類音類義語の事態を認識し、必要に応じては放送する立場のような態度で意識して話し、速記する立場のような態度で意識して聞き、もつて円滑な言語生活を営む技術を習得することが好ましいのである。そうしてこれが聞き方、話し方を中心とする国語教育において重要な項目の一つとなることを見のがしてはならないのである。

終り